

# なつかしさを認知的-感情的基盤と機能

—個人差と年齢変化—

楠見 孝

京都大学

Cognitive-affective aspects and functions of nostalgia:  
Individual differences and age-related changes

Takashi KUSUMI

Kyoto University

In this study, the cognitive-affective aspects and function of nostalgia were examined, based on individual differences and age-related changes. In Study 1A, the participants rated the centrality of features of nostalgia and *natsukashisa* (Japanese word for nostalgia), which were classified as central (i.e., autobiographical memory and positive emotion) or peripheral (i.e., negative and mixed emotion). In Study 1B, we developed the Positive–Negative Nostalgia Proneness Scale, based on the positive-negative features of nostalgia. The results showed that negative nostalgia proneness decreased with age; however, positive nostalgia proneness increased with age. In Study 2, negative nostalgia proneness was correlated with rumination and loneliness. Positive nostalgia proneness was correlated with happiness and nostalgia triggers (e.g., people/place and media), which increase with age. In Study 3, the presentation of nostalgic pictures increased familiarity and positive nostalgia proneness, and subsequently increased perceived social support and life satisfaction. In Study 4, positive nostalgia proneness affected the positive functions of nostalgia, and subsequently affected life satisfaction. These positive functions of nostalgia increased with age. These age-related changes are consistent with the socioemotional selectivity theory. We discuss potential future research addressing mere-exposure effects, autobiographical memory, cross-cultural, and aging studies.

**Key words:** nostalgia, aging, autobiographical memory, familiarity psychological wellbeing, socioemotional selectivity

キーワード：なつかしさ、加齢、自伝的記憶、親近性、幸福感、社会情動性選択理論

## 1. はじめに

本論文の目的は、なつかしさのもつポジティブ-ネガティブな機能の個人差に関して、その認知的-感情的基盤を検討することである。本論文では、そのために、なつかしさの概念構造を検討し、つぎになつかしさを引きおこす傾向性、トリガーを解明し、最後に、なつかしさが果たす機能について検討する。本論文では、これら4つについて、個人差と年齢差に着目して5つの研究にもとづいて議論する。その具体的な目的は以下の4つに分かれる。

第一は、なつかしさの認知的-感情的要素について、日本において研究する上での出発点として、「なつかしさ」の概念構造を、「ノスタルジア」

「nostalgia」と比較して解明することである。本論文では、日本語「なつかしさ」の語源が、「なつく」という人や物との反復接触に基づく過去の親密性を土台にしていることに注目する(2.1参照)。さらに、nostalgia概念の普遍性について、Hepper et al. (2014)による18カ国の国際比較研究に基づいて検討する。彼女らは、35のnostalgiaの特徴(図1参照)との意味的関連性について評定を求めている。その結果、文化を越えて共通する意味は、[子どもの頃]、親密な[人間関係]を中核とする[過去]の[幸福]で、[心地よい][個人的に意味]のある[記憶]を[想起]することであった。これらは、nostalgiaの中核の意味といえる。とくに、なつかしさがポジティブな意味を中核とし、親密な社会的結びつきを支えるポジティ

ブな機能をもつ感情であることは、後述の第4の目的であるなつかしきの機能の個人差解明に通じる。さらに、ポジティブな感情（例：幸せ）を引き起こすなつかしきとネガティブな感情（例：さびしさ）を引き起こすなつかしきの両面に焦点を当てて、「なつかしき」「ノスタルジア」「nostalgia」の異同を、新たな大規模調査による研究1Aに基づいて検討する。

第二は、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向性の個人差を測定する尺度を開発し、その年齢変化やなつかしきのポジティブ-ネガティブ感情の喚起、自分の過去や過去の時代に対するなつかしき喚起に及ぼす影響を検討することである。従来、個人差としてのなつかしき傾向性は、なつかしいことがらの想起しやすさやなつかしきに価値をおく程度に基づいて測定されてきた。たとえば、Southampton Nostalgia 尺度 (SNS; Barrett et al., 2010; Routledge et al., 2008) は、nostalgia 経験をどのくらいの頻度で想起し、そのことに価値をおくかについて、測定するものである (付表1)。また、Batcho Nostalgia Inventory (BNI; Batcho, 1998) は、様々なトリガーからの nostalgia の想起しやすさを測定するものである (表3)。Holbrook (1993) の Nostalgia Proneness 尺度 (HNP) は、個人のもつ nostalgia 傾向を測定するために、過去の時代に対する思いなど、レトロマーケティングなどの消費者行動研究のための文化的ノスタルジアを含む尺度であった。これらの先行研究では、ポジティブ-ネガティブのどちらの感情を引き起こすなつかしきが喚起されやすいかという傾向性は測定されていなかった。そこで、研究1Bでは、35の nostalgia の特徴 (図1) にもとづくなつかしき傾向性尺度を開発し、20歳代から70歳代の幅広い対象からデータを集め、その年齢差や、人生の過去の時期 (例：中学校時代) に対するなつかしきや過去の時代 (例：昭和30年代) に対するなつかしきとの関連を検討する。

第三は、なつかしきの認知-感情的基盤として、なつかしきを引き起こす要因であるトリガーとその個人差を検討することである。なつかしきを喚起するトリガーの種類については、Wildschut et al. (2006) がなつかしきを引き起こす状況についての自由記述に基づいて検討している。上位の3カテゴリは、ネガティブ感情状態 (例：孤独)、社会的

相互作用 (例：旧友との再会)、感覚的入力 (例：写真、音楽) であった。また、前述の Batcho Nostalgia Inventory (BNI; Batcho, 1998) は、様々なトリガー (例：家族、場所、おもちゃ) による nostalgia の喚起しやすさを測定している。研究2では、過去の親密性を土台としたなつかしきに焦点を当てるため、Batcho Nostalgia Inventory の項目をトリガーとして検討する。また、感情状態によるトリガーについては、第二で取り上げたなつかしきポジティブ-ネガティブ傾向性に基づいて検討する。

第四は、なつかしきのもつポジティブ-ネガティブな機能の個人差を明らかにすることである。なつかしきのポジティブな機能は、これまでの研究から大きく3つに分かれる (Sedikides & Wildschut, 2018, 2019)。1つめは、社会的絆を強化する機能である。なつかしきは、親密な他者との思い出を想起させ、他者とのつながりを認識させ、孤独感を低減し、向社会的行動を促進する (e.g., Hepper et al., 2012; Wildschut et al., 2006)。2つめは、自己関連の機能である。なつかしきは、自分が主人公となる自伝的記憶の想起に伴う感情であり、自己の時間的連続性の認識を高め、自己を明確化させて、自尊心を向上させる (e.g., Sedikides et al., 2016; Wildschut et al., 2006)、これは、自伝的記憶の3つの機能の一つとしての自己の一貫性や自己評価を支えている自己機能と対応する (Bluck, 2003)。3つめは、実存的機能であり、なつかしきは人生の過去の様々な時期の出来事の想起をともなうため、人生の意味を認識させ (e.g., Hepper et al., 2012)、死への脅威を低減させること (Juhl et al., 2010) になる。このように、なつかしきの主な機能はポジティブな機能であって、孤独感や抑うつを高めるなどのネガティブな機能に焦点を当てた研究は多くない (e.g., Routledge, 2016; Verplanken, 2012)。しかし、なつかしきのネガティブ傾向性の高い個人は、なつかしきのポジティブな機能だけでなく、ネガティブな機能を引き起こすと考えて、研究2ではこれら2つの機能を検討する。さらに、研究3では、なつかしき喚起の有無によって、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向がポジティブ機能に及ぼす効果を検討し、研究4では、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向が複数の機能に及ぼす効果と年齢変化を検討する。

## 2. なつかしさの概念構造：研究 1A

### 2.1 なつかしさとノスタルジアとの差異

なつかしさ研究を進めるにあたって、なつかしさの概念に関わる2つの問題をここでは取り上げる。

第一は、「なつかしさ」と「ノスタルジア」の意味の相違についてである（楠見，2014a）。

「なつかしさ」の語源は、古語「なつかし」であり、動詞「なつ（懐く）」を形容詞化したものである。心がひかれて離れたいことから、魅力的であること、すぐそばに身を置きたいことをもとは意味しており、奈良時代の『万葉集』にも用例がある。それが、鎌倉時代以降には、かつて慣れ親しんだ人や事物、場所などを思い出すときにともなう感情を示すようになった（北原ら，2003）。日本語の「なつかしさ」は、「なつく」という親密性にもとづく、ポジティブな感情であることが特徴である。このことについては、4.4において単純接触効果に基づいて再度説明をおこなう。

一方、nostalgiaの語源は、ギリシア語 nostos（家に帰る）と algos（苦しんでいる状態）を結合させた造語である。スイスの医師 Hofer が17世紀後半に、故郷から離れて戦う兵士の重いホームシックによる症状に付けた名前に由来する。しかし、1950年代には、精神医学用語ではなく、市民の話し言葉、コマーシャルにおいてポジティブな意味で使われるようになり、現在では、ホームシックを連想する人は少数派である（Davis, 1979）（これについては、研究 1A で検討する）。

「nostalgia」は世界の多くの国で外来語としてそのまま使われており、Hepper et al. (2014) の nostalgia 概念の 18 カ国の国際比較研究において、日本（なつかしさ）、中国（懷舊）、エチオピア（Tizita）以外の 15 カ国で用いられた。この調査に参加した筆者が、nostalgia 概念について日本でのデータ収集をする際に、外来語である「ノスタルジア」ではなく「なつかしさ」を用いた理由は以下の理由による。「なつかしさ」は、形容詞「なつかしい」、動詞「なつかしむ」など、さまざまな日本語表現が自然にできるためである。さらに、「なつかしさ」は、「ノスタルジア」に比べて、子どもや高齢者でも、定義や説明をしないで使

うことができる分かりやすい語である。なお、Hepper et al. (2014) の冒頭では、日本の女性が、普通だった学校を車で通りかかって「なつかしい」と叫ぶ例が挙げられている。私たちがこうした経験に対して最初に付与する感情のラベルは、「なつかしい」の方が「ノスタルジア」よりも使われやすいと考える。したがって、Southampton Nostalgia 尺度（SNS: Barrett et al., 2010；Routledge et al., 2008）において、「どのくらい頻繁になつかしさを経験しますか？」（付表 1）と「あなたは、どのくらいの頻度でノスタルジアを経験しますか？」（長峯・外山，2019）では、意味が微妙に異なる可能性がある。

さらに、「なつかしい」あるいは「ノスタルジア」を日本において研究で用いる場合、それらの意味が、英国人における nostalgia と同じであるかを確認する必要がある。そこで、研究 1A では、これらのなつかしさに関する語の概念構造の比較検討をおこなう。

第二は、なつかしさ研究の実施における「nostalgia（ノスタルジア）」の定義の問題である。

社会学者 Davis (1979) は、「nostalgia」を、過去の美しさ、楽しさ、喜び、満足、幸福、愛などのポジティブな感情 (affect) としている。一方で、不幸、フラストレーション、絶望、恥などの感情 (sentiment) で満たされることはないとしている。そして、「nostalgia」には、強いネガティブな感情はないものの、現在への不満、思慕 (yearning)、ほろ苦さ (bitter sweet) などがあることを指摘している（日本語では、異なる表現「甘酸っぱさ」がよく使われる）。

このように、nostalgia は、ポジティブな感情が優勢で、ポジティブとネガティブが入り交じった感情と弱いネガティブな感情から構成されている。しかし、実験や質問紙調査においては、nostalgia（ノスタルジア）を説明する際に、ネガティブな感情や過去への憧れが、定義として用いられている。たとえば、nostalgia 研究を牽引している Sedekides グループの一連の研究 (e.g., Wildschut et al., 2006) では、つぎのように定義している。“Nostalgia is defined as a ‘sentimental longing for one’s past’ or as feeling sentimental for a fond and valued memory from one’s personal past (e.g., childhood, close relationships, momentous events).

(Nostalgiaは「過去に対する感傷的な憧れ」、または自分の個人的な過去(例えば、子ども時代、親しい関係、重大な出来事)への甘美で大切な記憶に対する感傷的な感情として定義される)。この定義は、「過去に対する感傷的な憧れや物思いに沈んだ感情」(sentimental longing or wistful affection for the past) (The New Oxford Dictionary of English, 1998) に依拠している。こうした定義を踏襲している長峯・外山(2020)では、「ノスタルジアとは個人の過去に対する感傷的な思慕」という定義(長峯・外山, 2016)を示した際に、わかりにくいと感じる参加者がいる可能性を考慮し、長峯・外山(2018)にならった簡略的な説明として、「過去の出来事を懐かしく感じ、感傷的(センチメンタル)な気持ちになること」も同時に提示している。ここでは、「ノスタルジア」という外来語を用いることと、「感傷的」という説明が、ポジティブな意味も持つ nostalgiaにおいてネガティブな感情に焦点化する問題点がある。

以上述べた「なつかしさ」と「ノスタルジア」に関する概念の問題点は、この分野の研究を進める上で、データに基づいて検討する必要があるため、2.2では、Hepper et al. (2014)の手法とデータを用いて、なつかしさとノスタルジアの概念の比較、あわせて、nostalgia概念との比較をおこなう。

## 2.2 なつかしさと Nostalgia の共通性と差異

なつかしさ(nostalgia)の典型的な意味を解明するために、Hepper et al. (2012, Study 2)は、自由記述(Hepper et al., 2012, Study 1)に基づく35の特徴について、英国市民( $n=102$ )に意味的関連性を8点尺度で求めた。楠見(2014a)も35の特徴について、日本人の大学生( $n=96$ )に意味的関連性評定を求めた。英国人(Hepper et al. (2012, Study 2)と日本人(楠見, 2014a)におけるなつかしさに関する意味的関連性評定値の相関は.82と高いものであった。日英間で平均評定値の差があったのは、[あこがれ/願望][白昼夢]は英国(5.4, 5.3)が高く日本(4.5, 3.7)が低いことである。また、「なつかしさ」と社会的結びつきに関しては、日英いずれにおいても[人間関係](日5.7, 英6.3)との関連性を高く評価し、一方[孤独](日3.7, 英3.2)との関連性を低く評価していた。このようになつかしさは、人との過去のつ

ながりが想起されて、孤独感が小さくなる感情と考えられる(こうしたなつかしさの機能については、5で取り上げる)。しかし、日本人側の調査は、大学生96人を対象とした少ないサンプルの調査であり、「ノスタルジア」との比較もおこなっていなかった。そこで、幅広い年齢群の日本人を対象として、「なつかしさ」と「ノスタルジア」との違いを検討するための調査をおこなう。

## 2.3 方法(楠見, 2014b)

### 2.3.1 回答者

全国700(男女各350)人の20~79歳のインターネット調査会社のモニターであった(20~60代は各年代120人, 70代は100人, 男女同数)。職業は就労者57%, 主婦20%, 無職17%であった。学歴は4年制大学卒以上47%, 既婚者59%であった。

### 2.3.2 質問項目

なつかしさとノスタルジアのそれぞれに対して、35の特徴(Hepper et al., 2012; Hepper et al., 2014)について、意味関連性評定を求めた。教示は次の通りである。「あなたは、[なつかしさ(ノスタルジア)](どちらかを提示)ということ考えたとき、どのようなことが頭に浮かびますか。下にならんでいるコトバがそれぞれどのくらいあなたの考える[nつかしさ(ノスタルジア)]に関わるか、[1:まったく関係しない]から[8:非常に関係する]までの数字のいずれかにチェックしてください。

## 2.4 結果と考察

「なつかしさ」「ノスタルジア」の35の特徴との意味的関連性の程度についての平均評定値とその有意差を示したものが、図1である。参考までに、「nostalgia」についての英国の市民102人のデータ(Hepper et al., 2012, Study 2, 18~53歳( $M=23.2$ ), 女性75%)も示した。

「なつかしさ」「ノスタルジア」「nostalgia」に共通して関連性評定値が高いのは、[子どものころ/若いころ]の[記憶]を[思い出す][回想すること]などの自伝的記憶の要素であった。ここで、ポジティブ-ネガティブ感情に着目して、「なつかしさ」「ノスタルジア」「nostalgia」の共通点をみると、ポジティブな感情にかかわる[甘い記憶][心地よさ]は関連性評定値が高く中



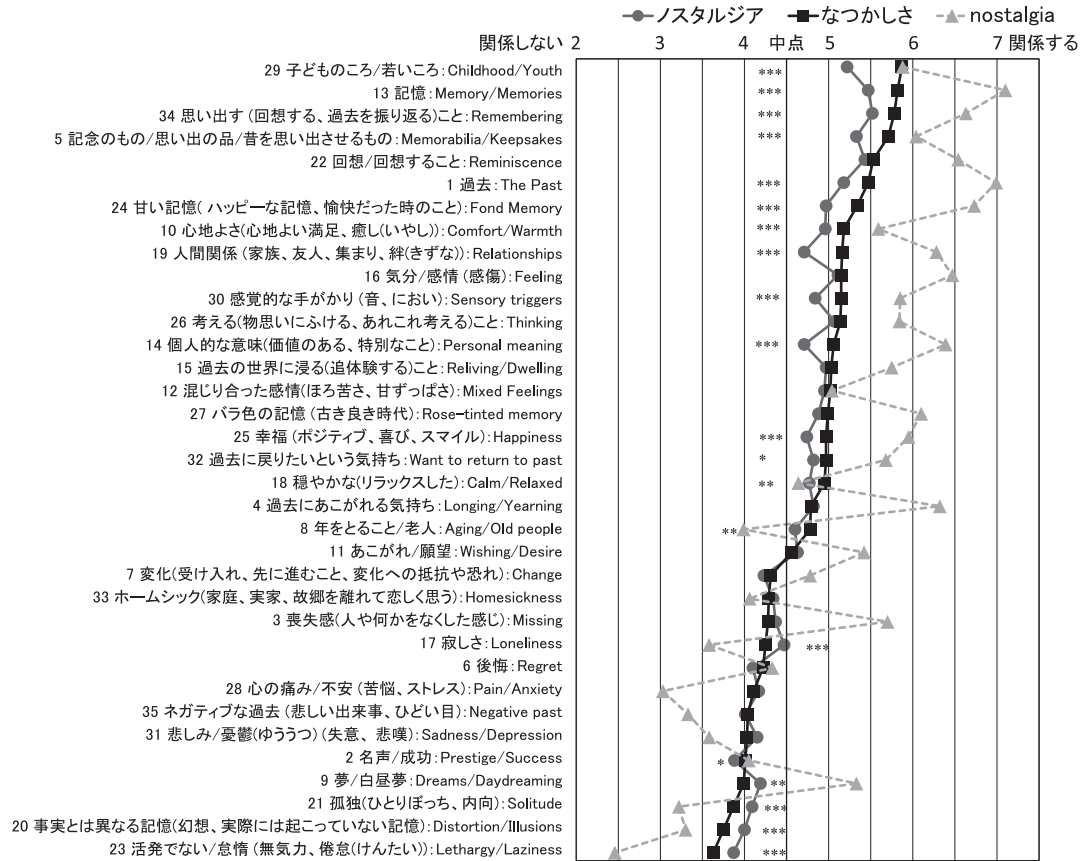


図1 「なつかしさ」「ノスタルジア」「nostalgia」の35の特徴との意味的関連性評定値(8点尺度, 中点4.5, 両者の平均値の有意差 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$ , 「nostalgia」評定値は Hepper et al. 2012 に基づく)(研究1A)

心的特徴であり、一方、ややネガティブな感情である[ホームシック][寂しさ][孤独]は低く、周知の特徴であった。[混じり合った感情(ほろ苦さ、甘酸っぱさ)]は中間にあることが分かった。全体として、「なつかしさ」と「ノスタルジア」の概念的差異は小さく、両者の相関は.97である。さらに、両者とも英国人の「nostalgia」についての評定(Hepper et al., 2012, Study 2)との相関(なつかしさ.85, ノスタルジア.84)は同程度であった。

関連性評定値の差異に着目すると、「なつかしさ」は「ノスタルジア」に比べ、[子どものころ][記憶][思い出す][記念のもの/思い出の品]など自伝的記憶に関する特徴、[甘い記憶][心地よさ][幸福][穏やかな]などポジティブな特徴など15の特徴において、関連性が有意に高く評価された。さらに15中14の特徴は、関連性平均評定値が8点尺度において中点4.5以上の中核的

意味である。一方の「ノスタルジア」は関連性平均評定値が中点4.5未満の周知の意味である[夢/白昼夢][孤独][事実とは異なる記憶(幻想)]や[活発でない/怠惰(無気力、倦怠)]などのややネガティブな特徴との関連が、「なつかしさ」よりも高く評定された。なお、Hepper et al. (2012)による英国人のnostalgia評定は、日本人の「なつかしさ」と「ノスタルジア」評定と比べると、[過去にあこがれる気持ち][喪失感][夢/白昼夢]が高い。前二者は、先に挙げた“sentimental longing or wistful affection for the past”という辞書の定義とも対応する。

以上のことから、「なつかしさ」の方が、「ノスタルジア」よりも、「nostalgia」にかかわる多くの特徴についての意味的関連性評定が高いこと、とくに、中核的意味に関わる自伝的記憶にともなうポジティブ感情については、より意味的関連性が高いことが明らかになった。

### 3. なつかしさの傾向性となつかしさの生起： 研究 1B

#### 3.1 なつかしさのポジティブ・ネガティブ傾向性

研究 1A では、なつかしさの概念には、過去の想起とそれにもなう、ポジティブ感情とやや弱いネガティブ感情があることを示した。このことから、なつかしい記憶想起によって、ポジティブとネガティブのどちらの感情が起きやすいかという傾向性の個人差があることが考えられる。さらに、このなつかしさの傾向性が、なつかしさの機能に異なる影響を及ぼす可能性がある。そこで、研究 1B では、なつかしさがポジティブ、ネガティブのどちらの感情を引き起こしやすいのかの個人差と、その年齢差や男女差を検討する。そのために、2.3 で用いたなつかしさの 35 の特徴（例：回想、感傷）(Hepper et al., 2014) に基づいて、なつかしさの経験の記述（例：回想することがよくある、昔を思いだして感傷的な気分になる）を作成して、傾向性を測定する。

#### 3.2 方法 (楠見, 2014b)

##### 3.2.1 回答者

全国 700 (男女各 350) 人の 20~79 歳のインターネット調査会社のモニターであった (1.3 の研究 1A と同時に行った)。

##### 3.2.2 質問項目

(a) なつかしさの傾向を捉えるために、Hepper et al. (2012) のなつかしさの 35 の特徴（例：回想、感傷）に基づく、なつかしさの経験の記述（例：回想することがよくある、昔を思いだして感傷的な気分になる）を作成した。そして、それぞれの経験が自分自身にどのくらいあてはまるかを 8 段階 (1: 全くあてはまらない - 8: 非常にあてはまる) の評定を求めた。(b) 人生を振り返って、どの時期 (0~3 歳, 4~6 歳 [幼少期], 6~12 歳 [小学校時代], 13~15 歳 [中学校時代], 16~18 歳 [高校時代], 19~22 歳 [20 歳前後], 23~29 歳 [20 代中頃から後半], および 30~39 歳 [30 代] から 70~79 歳 [70 代] の 6 つの時期) のどの時期がどのくらいなつかしいかを 6 点尺度 (1: まったくなつかしくない - 6: 非常になつかしい) で評定を求めた。ここで、20 代の回答者の場合は 0~3 歳から 19~20 歳までの 6 つの時

期で、年代が上がるごとに評定する時期は増え、70 代は 70 代までの 12 の時期に対する評定を求めた。(d) どの時代 (昭和 20, 30, 40, 50, 60 年代, 平成元, 10, 20 年代の 8 つの時代) をなつかしく感じるかを 8 段階で評定を求めた。それぞれの年代については、西暦、時代を表す言葉、内閣の首相名、手がかりとなる出来事を示した (例: 「昭和 30 年代 (1955-1964 年, 高度経済成長期前半, 石橋・岸・池田内閣, 東京オリンピック [昭和 37 年] の時代)」。 (e) 外部妥当性を検討するために、Holbrook (1993) の Nostalgia Proneness 尺度 (HNP) 短縮版 8 項目 (分析に用いた 4 つの順項目: 古き良き時代にあこがれる; 今日という日は、残念ながら、かつてあったようにはないと思う; 私たちは生活の質 (クオリティ オブ ライフ) の低下を経験している; 最近の商品は安物になり、本物ではなくなってきていると思う), 後悔尺度 5 項目 (Schwarz et al., 2002) (例: 自分の人生はうまくいっているだろうかと考えるときに、見送った機会についてあれこれ考えることがよくある), 人生満足度 5 項目 (Diener et al., 1985) (例: 私は自分の人生に満足している) について 8 点尺度で評定を求めた。

#### 3.3 結果と考察

##### 3.3.1 なつかしさポジティブ・ネガティブ傾向性

なつかしさの経験の傾向に関わる 35 項目の項目間相関行列に基づいて、探索的因子分析 (最尤法, プロマックス回転) をおこなった結果、3 因子を抽出した。そして、高い因子負荷量 ( $\pm 0.30$  以上) を複数因子や概念的に異なる因子に示した 17 項目を除く項目選択をおこなった。再度因子分析をおこない、表 1 に示す各因子に対応する 3 下位尺度を構成した (3 因子の累積説明率は 59.2%)。ネガティブ傾向 (7 項目,  $\alpha = .91$ ), ポジティブ傾向 (7 項目,  $\alpha = .87$ ), 回想傾向 (4 項目,  $\alpha = .88$ ) であった。回想傾向因子は、ポジティブ傾向因子とネガティブ傾向因子の両者と高い相関をもつ。

3 つの平均尺度得点の年齢変化を示したのが図 2 である。なつかしさによるネガティブ感情が喚起される傾向は、加齢により低下した。回想傾向の加齢による低下は緩やかであった。一方、ポジティブ感情が喚起される傾向は加齢で上昇した。これは、加齢にしたがいネガティブよりポ

表1 なつかしさポジティブ-ネガティブ傾向性尺度 (NP-P, N) の項目平均値 (SD) と因子負荷量 (最尤法, プロマックス回転) N=700 (研究1B)

項目	M	(SD)	因子			共通性
			ネガティブ傾向	ポジティブ傾向	回想傾向	
23. 昔を思い出して、無気力や倦怠 (けんたい) 感を感じる	3.60	(1.85)	<b>.90</b>	.02	-.14	.66
31. 昔を思い出すと、悲しみや憂鬱 (ゆううつ) を感じる	3.92	(1.83)	<b>.86</b>	-.17	.01	.72
28. 昔を思い出すと、心の痛みや不安 [苦悩, ストレス] を感じる	3.89	(1.88)	<b>.85</b>	-.11	-.01	.68
21. 昔を思い出して、孤独を感じる	3.66	(1.84)	<b>.80</b>	.06	-.02	.64
17. 昔を思い出して寂しくなる	3.97	(1.84)	<b>.65</b>	.12	.12	.60
6. 昔を思い出して後悔する	4.35	(1.93)	<b>.57</b>	-.05	.21	.51
16. 昔を思い出して感傷的気分になる	4.24	(1.76)	<b>.46</b>	.24	.20	.54
18. 昔を思い出して穏やかな、リラックスした気分になる	4.25	(1.64)	.06	<b>.85</b>	-.21	.58
25. 昔を思い出して、幸福な気持ちになる	4.28	(1.65)	-.12	<b>.80</b>	.02	.63
10. 昔を思い出して、心地よい満足や癒 (いや) しを感じる	4.29	(1.65)	-.02	<b>.77</b>	.00	.58
27. バラ色の記憶 [古き良き時代] を思い出す	4.12	(1.77)	.15	<b>.72</b>	-.08	.51
24. 甘い記憶 [ハッピーな記憶, 愉快だった時のこと] をしばしば思い出す	4.49	(1.67)	-.01	<b>.64</b>	.17	.55
19. 昔を思い出すと人間関係 (家族, 友人など) の絆 (きずな) を感じる	4.64	(1.81)	-.18	<b>.62</b>	.09	.43
14. 昔の出来事を思い出し、自分にとっての意味や価値を認識する	4.51	(1.63)	.10	<b>.42</b>	.24	.40
34. 昔を思い出す [回想する, 過去を振り返る] ことがよくある	4.53	(1.75)	.02	-.05	<b>.85</b>	.70
22. 回想することがよくある	4.42	(1.77)	.04	.01	<b>.77</b>	.64
13. 昔の記憶をしばしば思い出す	4.66	(1.73)	.06	.03	<b>.74</b>	.63
1. 過去をよく振り返る	4.25	(1.74)	.21	-.01	<b>.67</b>	.68

ネガティブ傾向	-	.19	.67
ポジティブ傾向		-	.54

注：項目番号は図1と対応する。8点尺度 (1：まったくあてはまらない-8：非常にあてはまる)。太字は因子負荷量 .40 以上

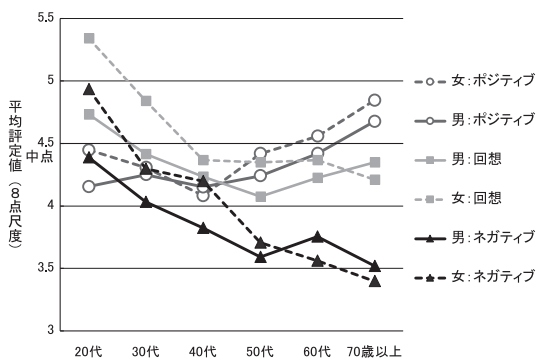


図2 なつかしさポジティブ-ネガティブ傾向性尺度 (NP-P, N) の平均評定値の年齢変化 (8点尺度, 中点4.5) (研究1B)

ジティブ情報を選択する社会情動的選択性理論 (Carstensen, 1992) によって説明ができる。また、女性は男性よりも20歳代におけるポジティブお

よびネガティブ傾向が男性よりも強かった。

### 3.3.2 なつかしい人生の時期と時代

人生におけるなつかしい時期は、若年者層、高齢者層の年齢群を問わず10代後半から20代にピークがあった (図3)。このことは、青年期の多くの事柄が想起されるという自伝的記憶のレミニセンス・バンプ (reminiscence bump) 現象 (e.g., Jansari & Parkin, 1996) と対応する。この現象は、青年期には、人生において重要で新奇性・示差性の高い出来事があること、アイデンティティが確立し、記憶パフォーマンスが最も高い時期であることから、説明できる。一方で、5歳以前の時期のなつかしさ評定値が中点以下である原因は、アイデンティティが確立しておらず、記憶パフォーマンスが十分ではないためと考えられる。

なつかしい時代は、図4に示すとおり、どの年

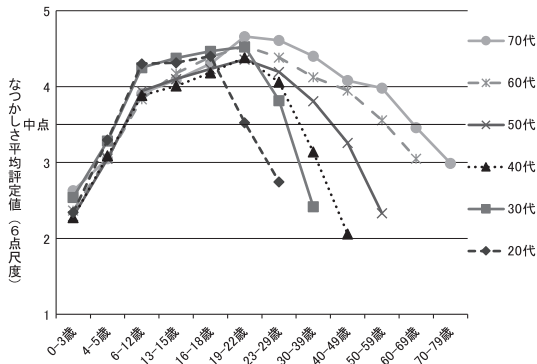


図3 年齢群別の「自分の人生の時期に対するなつかしさ」平均評定値の年齢変化（6点尺度，中点3.5）（研究1B）

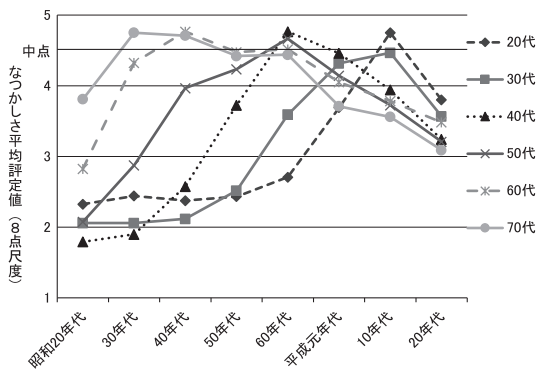


図4 年齢群別の「時代に対するなつかしさ」平均評定値の年齢変化（8点尺度，中点4.5）（研究1B）

年齢群においても10年以上前の10歳以降に経験した時代であった。これは、図3に示したように自分の人生において青年期がなつかしく、それを過ごした時代にもなつかしさを感じることに対応する。一方、生まれる前の時代についてのなつかしさ評定は低いことがわかった。昭和30年代（高度経済成長期前半）は、なつかしい時代として映画『ALWAYS：三丁目の夕日』（2005）などのテーマになっているが、その時代になつかしさを感じるのは、その時代を過ごした経験のある年齢群の回答者であった。

### 3.3.3 なつかしさポジティブーネガティブ傾向尺度（NP-P, N）の外部妥当性

なつかしさ傾向尺度の妥当性を確認するために、関連する尺度との相関を検討した（表2）。既存尺度である Holbrook Nostalgia Proneness 尺度短縮版8項目のα係数は.41と低かった。反転項

目を除いた4項目のα係数は.65であった。そこで4つの順項目を使って尺度値を算出して以下の分析に用いた。

なつかしさポジティブーネガティブ傾向の3下位尺度と [Holbrook Nostalgia Proneness] との相関（表2）は、男女それぞれで [ポジティブ傾向]（男.60, 女.39, 以下同じ）、[ネガティブ傾向]（.54, .47）、[回想傾向]（.60, .48）と高い相関があった。このことから既存尺度との外部妥当性は確認された。また、[後悔尺度] との相関は、[ネガティブ傾向]（.50, .59）、[回想傾向]（.50, .43）が高く、[ポジティブ傾向]（.31, .12）は低かった。[人生満足度] とは、[ポジティブ傾向]（男.15, 女.26）は正相関、[ネガティブ傾向]（-.26, -.39）と [回想傾向]（-.12, -.17）とは負相関であった。これらは、なつかしさネガティブ傾向が後悔や低い人生満足度と関連することを示している。

また、[自分の過去の時期へのなつかしさ] 平均評定値となつかしさ傾向の3下位尺度との相関は、[ポジティブ傾向]（男.36, 女.46）と、[回想傾向]（.32, .29）は中程度で、[ネガティブ傾向]（.09, .10）は低かった。文化的・歴史的ななつかしさである生まれる前も含む [過去の時代へのなつかしさ] 平均評定値と3下位尺度との相関は、[ポジティブ傾向]（.52, .47）との間が高く、[回想傾向]（.28, .24）、[ネガティブ傾向]（.23, .20）の順であった。とくに、[ネガティブ傾向] は、[自分の過去の時期へのなつかしさ] や、文化的・歴史的ななつかしさである [過去の時代へのなつかしさ] との相関が、[ポジティブ傾向] [回想傾向] と比べて低いことが特徴である。

研究1Bでは、研究1Aで検討した、なつかしさにおけるポジティブ感情のなつかしさとやや弱いネガティブな感情の特徴に着目して、どちらの感情が起きやすいかという傾向性の個人差を測定する尺度を開発した。その結果、なつかしさのポジティブ傾向性が加齢で上昇し、ネガティブ傾向性が低下することが明らかになった。また、相関分析の結果、なつかしさのポジティブ傾向性は、ネガティブ傾向性よりも、自分の過去の時期をなつかしく思い、自分の生まれる前も含む過去の時代をなつくしく思うこととの関連が高いことがわかった。つぎの4では、こうしたなつかしさのポジティブーネガティブ傾向と、なつかしさを引き



表2 なつかしさ傾向尺度 (NP-P, N, R) と関連尺度の相関 (研究1B)

	女性 (n=350)		なつかしさ傾向				過去へのなつかしさ		後悔	人生満足度 (SWLS)
	男性 (n=350)	年齢	ポジティブ (NP-P)	ネガティブ (NP-N)	回想 (NP-R)	Holbrook Nostalgia (HNP)	人生の時期に 対する なつかしさ	時代に 対する なつかしさ		
年齢										
なつかしさポジティブ傾向 (NP-P)	.11 *	.12 *	.40 ***	-.31 ***	-.22 ***	.09	.00	.31 ***	-.19 ***	.19 ***
なつかしさネガティブ傾向 (NP-N)	.40 ***	-.20 ***	.59 ***	.10	.39 ***	.39 ***	.46 ***	.47 ***	.12 *	.26 ***
なつかしさ回想傾向 (NP-R)	.59 ***	-.10	.72 ***	.72 ***	.66 ***	.47 ***	.10	.20 **	.59 ***	-.39 ***
Holbrook Nostalgia Promeness 尺度 (HNP) (4項目)	.60 ***	.10	.54 ***	.54 ***	.60 ***	.48 ***	.29 ***	.24 ***	.43 ***	-.17 **
自分の人生の時期に対するなつかしさ	.36 ***	.07	.09	.09	.32 ***	.24 ***	.20 ***	.36 ***	.30 ***	-.12 *
過去の時代に対するなつかしさ	.52 ***	.30 ***	.23 ***	.23 ***	.28 ***	.40 ***	.32 ***	.34 ***	.11 *	.18 **
後悔	.31 ***	-.18 ***	.50 ***	.50 ***	.50 ***	.34 ***	.10	.18 ***	.15 *	.19 **
人生満足度 (SWLS)	.15 **	.16 **	-.26 **	-.26 **	-.12 *	-.08	.12 *	.25 **	-.14 **	-.27 ***
M (SD)	男性 48.7 (16.2)	48.7 (16.2)	4.31 (1.20)	3.86 (1.34)	4.33 (1.40)	4.33 (1.16)	3.60 (.87)	3.62 (1.32)	4.46 (1.24)	4.46 (1.35)
	女性 48.3 (16.4)	48.3 (16.4)	4.43 (1.34)	4.03 (1.60)	4.59 (1.59)	4.46 (1.20)	3.64 (.91)	3.40 (1.44)	4.35 (1.39)	4.35 (1.53)
t (698)	0.37	0.37	1.32	1.54	2.22 *	1.46	0.54	2.19 *	1.08	1.08

註 \*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

起こすトリガー、そして、他の個人差指標との関連を検討する。

#### 4. なつかしき生起のトリガーと個人差： 研究2

##### 4.1 なつかしき生起のトリガー

Batcho Nostalgia Inventory (BNI; Batcho, 1998) は、昔、経験した事柄、場所、人など20項目についてどのくらいなつかしいかを評定する尺度である。この尺度を Batcho et al. (2008) は、個人的ななつかしさの尺度として位置づけている。この20項目を日本文化にあうように精選して、短縮日本版(2通りの10項目)を作成した(表3)。ここでは、各項目は、なつかしさを引き起こすトリガーとなる程度を測定するものとして位置づけた。なお、トリガー項目の網羅性を高めるために、研究4において、項目の一部を差し替えて実施したため、そのデータもここであわせて紹介する。

これらのなつかしさを喚起するトリガーの種類が、2で述べたなつかしさのポジティブとネガティブな傾向性や、とくに過去に対するネガティブな傾向性と関わると考えられる反芻-省察傾向、性格5因子の神経症傾向などの個人差特性と、

どのように関連するのかが明らかになっていない。そこで、研究2では、これらの点を明らかにするために、20~70代の市民を対象に大規模調査をおこなった。

##### 4.2 方法(楠見, 2015)

###### 4.2.1 回答者

全国の1000(男女各500)人。20~79歳のインターネット調査会社のモニターであった(20~70代の各年代82~84人, 男女同数)。そのうち429人は1年前の調査(研究1A, 1B, 楠見, 2014b)に参加していた。職業は就労者59%, 主婦21%, 無職18%であった。学歴は4年制大学卒以上47%, 既婚者61%であった。

###### 4.2.2 質問項目

(a) なつかしさのトリガー: 10項目(昔の友だち、学校、音楽、テレビ番組、アニメの主人公など)に対して、どの程度なつかしいかを5段階評定する尺度を、Batcho Nostalgia Inventory (BNI; 20項目, Batcho, 1998)にもとづいて作成した(なお、研究4(5.4参照)では、なつかしい料理などを入れるために4項目を差し替えた10項目を用いて、1001人に評定を求めた(表3))。

(b) なつかしさ傾向性: なつかしさのネガティブ

表3 Batcho Nostalgia Inventory (BNI) に基づくなつかしさのトリガーの平均評定値と因子負荷量

項目	研究2		研究4		研究2		研究4			
	M	(SD)	M	(SD)	1	2	1	2	3	4
昔、よく行った場所	3.45	(1.14)	-	-	<b>.69</b>	.11	-	-	-	-
わたしの家族	-	-	2.85	(1.40)	-	-	.02	<b>.91</b>	-.03	-.06
昔の友達	3.34	(1.18)	3.17	(1.21)	<b>.69</b>	.05	.00	.02	<b>.94</b>	-.05
愛したひと	3.05	(1.32)	2.80	(1.30)	<b>.68</b>	-.10	.14	<b>.32</b>	.19	.05
昔、通った学校	3.21	(1.22)	3.07	(1.22)	<b>.66</b>	.10	.15	-.06	<b>.35</b>	.33
実家の家	2.90	(1.36)	2.73	(1.37)	<b>.61</b>	-.16	-.06	<b>.49</b>	.04	.37
昔、休日に出かけたこと	3.03	(1.16)	-	-	<b>.53</b>	.16	-	-	-	-
昔のテレビ番組や映画	3.29	(1.11)	3.15	(1.17)	-.05	<b>.83</b>	<b>.76</b>	-.04	-.01	.06
アニメの主人公、ヒーロー	2.79	(1.20)	-	-	-.18	<b>.79</b>	-	-	-	-
昔、はやった音楽	3.55	(1.14)	3.35	(1.15)	.17	<b>.59</b>	<b>.70</b>	.09	.07	-.06
子ども頃のおもちゃ	2.88	(1.22)	-	-	.13	<b>.56</b>	-	-	-	-
子どもの頃、母親が作った料理	-	-	2.90	(1.30)	-	-	-.07	.23	.05	<b>.59</b>
子どもの頃、食べたお菓子	-	-	2.97	(1.22)	-	-	.35	-.13	-.01	<b>.56</b>
カルピス	-	-	2.29	(1.17)	-	-	.27	.17	-.17	<b>.36</b>
因子間相関	2				.68		.32			
	3						.61	.46		
	4						.68	.54	.64	

註: 5件法(1: まったくなつかしくない~5: とでもなつかしい), 太字は因子負荷量 .35以上, 研究2 (N=1000), 研究4 (N=1001)

傾向、ポジティブ傾向、回想傾向の3つの下位尺度（8点尺度、それぞれ7、7、4項目）（表1）と Southampton Nostalgia 尺度（SNS; Barrett et al., 2010; Routledge et al., 2008）の6項目（付表1、例：あなたはどのくらい昔をなつかしむ傾向がありますか）に対してのあてはまる程度の8点尺度、(c) 個人差指標：Big Five 10項目（TIPI-J, 小塩・阿部・カトローニ, 2012）、Rumination-Reflection Questionnaire 日本語版（RRQ-J）の反芻と省察各12項目、5点尺度（高野・丹野, 2008）（反芻：例 過去にあった場面で、自分がどう振舞ったかを頭の中でよく思い返している；省察：例「内的な」自己を探るのがとても好きだ）、改訂 UCLA 孤独感尺度（UCLA L.S.）短縮版（諸井, 1992）（10項目、5点尺度；例：私には、頼りにできる人がだれもない）、幸福度（11段階；0：不幸せ～10：幸せ）などについて評定を求めた。

### 4.3 結果と考察

#### 4.3.1 なつかしさのトリガーの年齢差

研究2と研究4（5.4参照）におけるなつかしさのトリガー（BNI）に基づくなつかしさのトリガーの平均評定値は、表3に示す通りである。

主要なトリガーについて、研究4のデータに基づいてその年齢変化を示したものが、図5である。図5Aに示すように、[昔の友だち]に対するなつかしさは、男女とも20代から一貫して高いが、かつて[愛した人]に対するなつかしさは、加齢によって上昇し、とくに男性は、50代以降は、高くなっていた。

一方、図5Bに示す場所についてのなつかしさは、[昔、通った学校]に対するなつかしさは、男女とも20代から一貫して高い。[実家の家]に対するなつかしさは、20代から40代は低い、加齢によって上昇し、とくに女性の70代以降は高くなっていた。これは、高齢者施設で見られる「夕暮れ症候群」（夕食時になると、実家の家に帰りたいと訴える高齢者）と対応する結果である。

図5Cに示す音楽と料理に関わるなつかしさは、[昔、はやった音楽]は、女性がいずれの年代でも高く、男性は加齢による上昇が見られる。[母親の作った料理]は、10～40代はなつかしくないが、加齢によりなつかしさが徐々に高まり、60代以降はとくになつかしくなる。このパターンは、

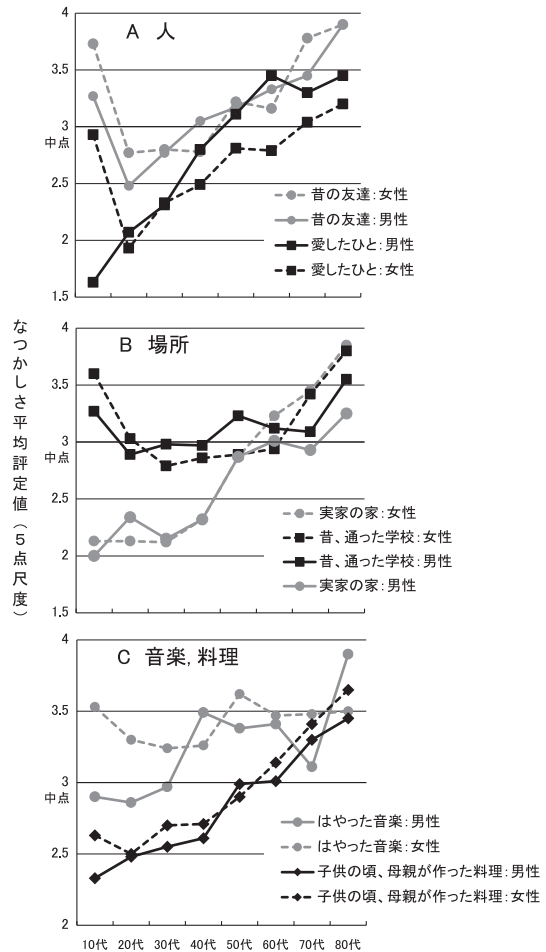


図5 なつかしさのトリガー（BNI）のなつかしさ平均評定値の年齢変化（5点尺度、中点3）（研究4）

実家の家へのなつかしさと対応する。

[昔、通った学校]や[昔、はやった音楽]についての結果は、どのようなCMになつかしさを感じるかの調査（Kusumi, Matsuda, & Sugimori, 2010）において、「学校場面を使っているCM」は女性においては10代後半から一貫して高く、「昔、何度も繰り返し聞いた曲を使っているCM」については、男女とも加齢によって上昇していたという点で、年齢変化のパタンの対応が見られた。

#### 4.3.2 なつかしさのトリガーの因子構造

10項目の項目間相関行列に基づいて、探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）をおこなった結果、2因子を抽出した。表3の6～7列に示す各因子に対応する2つの下位尺度を構成した（2因子の累積説明率は50.2%）。第1因子に負

荷量の高い項目は、場所、友だち、愛した人、学校、実家（6項目、 $\alpha=.82$ ）で、場所や人に関わるなつかしさのトリガーである。第2因子は、テレビ番組、アニメの主人公、音楽など（4項目、 $\alpha=.79$ ）で、メディアに関するなつかしさのトリガーである。

表3の4～5列と8～11列には、研究4（5.4参照）において、トリガー項目に、[子どもの頃、母親が作った料理]等を加えるなど、4項目を差し替えた結果を示す。探索的因子分析（最尤法、プロマックス回転）をおこなった結果、4因子を抽出した。表3に示す各因子に対応する4下位尺度を構成した（4因子の累積説明率は50.2%）。第1因子に負荷量の高い項目は、メディアに関わる昔のテレビや音楽（2項目、 $\alpha=.72$ ）で、加齢による緩やかな低下が見られた。第2因子の負荷量が高いのは、家族や実家の家、昔愛した人（3項目、 $\alpha=.72$ ）で、加齢によるなつかしさの上昇が見られた。第3因子は、昔の友だち、通った学校（2項目、 $\alpha=.72$ ）で、コンスタントになつかしさが高かった。第4因子は、子どもの頃、母親が使った料理、食べたお菓子、カルピス（3項目、 $\alpha=.69$ ）であった。

#### 4.4 なつかしさとトリガーの単純接触-空白期間モデル

図6は、なつかしさを引き起こすトリガーの単純接触-空白期間モデル（Kusumi et al., 2010）である。このモデルは、コマーシャルにおけるなつかしさを引き起こすトリガーに関する調査結果に基づいて構成したものである。表3におけるなつ

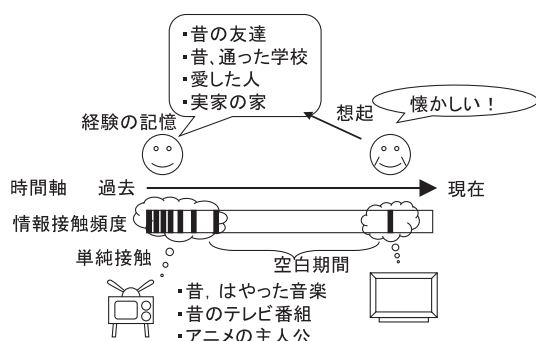


図6 なつかしさとトリガーの単純接触-空白期間モデル（楠見，2014aを改変）

かしさ評定値の高いトリガーは、昔の友だち、愛した人、昔、通った学校、昔、はやった曲などであり、図6に示すように、過去における頻繁な情報接触によって親近性が高まる段階がある。また、図3や図4で示したように、現在の出来事には、なつかしさが感じられることはなく、なつかしさが高まるまでは、出来事が起きてから現在までの数年以上の時間的空白が必要である。たとえば、実家の家や母親の料理の味がなつかしくなることは、図5に示すように、50代以降である。ここでは、実家を離れてからの30年以上の時間的空白がある。さらに、実家や両親などの対象の喪失によって、空白を埋めることができないことは、なつかしさを高めると考えられる。

##### 4.4.1 なつかしさとトリガーと個人差

図5に示したように、それぞれのトリガーによって喚起されるなつかしさについては、年齢差があった。そこで、まず65歳以上群と64歳以下群に分けて、なつかしさ傾向性、なつかしさを引き起こすトリガータイプと他の関連指標との相関を検討した（表4）。

まず、各指標の平均値をみると、65歳以上の方が、64歳以下よりも、[なつかしさとポジティブ傾向]や[幸福度]が高く、[ネガティブ傾向]や[孤独感]が低い。このように、高齢群ほどポジティブであるというポジティブ傾向が見られた（Carstensen, 1992）。

[なつかしさとポジティブ傾向]は、[人・場所トリガーによるなつかしさ]との相関が高く（64歳以下.54, 65歳以上.56, 以下同じ）、[メディアトリガーによるなつかしさ]とも正相関（.33, .40）があった。一方、[なつかしさとネガティブ傾向]と[人・場所/メディアトリガーによるなつかしさ]の相関は低かった（.10～.16）。これは、なつかしさとネガティブ傾向はネガティブ気分や孤独感といった気分・感情などの内的状態がトリガーになりやすいため、このような外部トリガーとの関連が低いことが考えられる。このことは、[なつかしさとネガティブ傾向]と[反芻]との正相関（.53, .39）、[孤独感]との正相関（.31, .33）、[幸福度]との逆相関（-.40, -.38）からも考えられる。なお、[なつかしさとネガティブ傾向]と[神経症傾向]との相関は64歳以下、65歳以上それぞれで.34, .05と差異があった。



表4 なつかしさ傾向尺度 (NP-P, NP-N), なつかしさのトリガーと関連指標の相関, 平均値 (SD) (研究2)

	性格5因子					RRQ-J			なつかしさ傾向性			トリガー		
	神経症	開放性	省察	反芻	なつかしさポジティブ	なつかしさネガティブ	なつかしさ回想	Southampton (SNS)	人・場所によるなつかしさ	メディアによるなつかしさ	孤独感	幸福度		
65歳以上 (n=233)														
64歳以下 (n=767)														
神経症傾向 (TIPI-J Neuroticism)														
開放性 (TIPI-J Openness)														
省察 (RRQ-J Reflection)														
反芻 (RRQ-J Rumination)														
なつかしさポジティブ傾向 (NP-P)														
なつかしさネガティブ傾向 (NP-N)														
なつかしさ回想 (NP-R)														
Southampton Nostalgia 尺度 (SNS)														
人・場所トリガーによるなつかしさ (BNI-JP)														
メディアトリガーによるなつかしさ (BNI-JM)														
孤独感 (UCLA L.S.)														
幸福度 (11段階)														
M (SD)	3.10 (1.11)	3.28 (1.08)	2.95 (0.53)	2.90 (0.53)	4.47 (1.41)	3.23 (1.36)	3.91 (1.44)	4.59 (1.13)	3.32 (0.91)	2.81 (0.87)	2.42 (0.66)	8.11 (1.90)		
64歳以下	3.39 (1.13)	3.31 (1.06)	2.95 (0.57)	3.04 (0.58)	4.23 (1.33)	3.83 (1.45)	4.15 (1.41)	4.32 (1.15)	3.11 (0.88)	3.22 (0.91)	2.69 (0.75)	7.18 (2.28)		
t (998)	3.48 ***	0.27	0.18	3.44 ***	2.35 *	5.63 ***	2.32 *	3.05 **	3.07 **	6.08 ***	4.98 ***	5.65 ***		

註 \*p<0.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

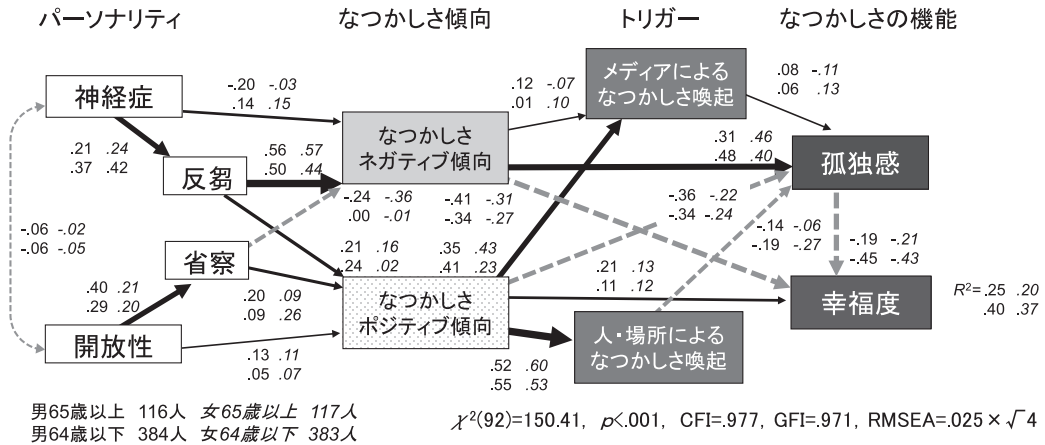


図7 パーソナリティ、なつかしき傾向が孤独感と幸福度に及ぼす影響：多母集団同時分析によるパス解析の結果（数値は標準化パス係数、点線は負の影響を示す）（研究2）

また、[なつかしき回想傾向]は[人・場所トリガーによるなつかしき]との相関が高く（.43, .45）、[メディアトリガーによるなつかしき]とも正相関（.35, .33）があった。

つぎに、多母集団同時分析によって、パス解析を男女65歳以上、64歳以下の4群に対しておこなった。適合度は、 $CFI=.977, RMSEA=.025 \times \sqrt{4}$ （集団数の平方根をかけた修正）（Steiger, 1998）であり、十分な適合度であった。図7に示すパス解析の結果は、(a) [なつかしきネガティブ傾向]は、[反芻]から後悔のしやすさなどを通して強い影響を受け、[孤独感]を高め、[幸福度]を低下させた。ここで、[神経症傾向]から[反芻]へ、[孤独感]から[幸福度]への影響は、64歳以下男女の方が65歳以上よりも大きかった。さらに、[メディアによるなつかしき喚起]を媒介せずに、[孤独感]を直接強く促進した。(b) [なつかしきポジティブ傾向]は、[開放性]や[省察]から影響を受け、[人や場所]と[メディア]のトリガーによるなつかしきを喚起した。また、[幸福度]を直接向上させた。(c) [人や場所によるなつかしき]の喚起は、[孤独感]の低減を媒介して、[幸福度]を向上させた。このように、なつかしきポジティブ傾向は適応的な機能を示したが、ネガティブななつかしき傾向は、適応的ではなかった（e.g., Verplanken, 2012）。

## 5. なつかしきの機能

### 5.1 なつかしき傾向が孤独感と人生満足度に及ぼす影響：研究3

なつかしきには、1で述べたようになつかしきポジティブ傾向（3参照）に関わる複数の機能がある（1の第4の目的を参照）。主な3つの機能としては社会的絆を強化する機能、自己関連の機能、実存的機能がある（Sedikides & Wildschut, 2018, 2019）。研究1Bでは、社会的絆を強めるようななつかしきポジティブ傾向が加齢によって上昇することが見いだされた。しかし、こうした傾向が、なつかしきトリガー刺激によって促進されるのか、さらに、社会的絆を強め、孤独感を低減させる機能に影響するのには十分に明らかにされていない。

そこで、研究3では、これらの点を明らかにするために、10～80代の市民を対象に、なつかしきトリガー刺激と中性刺激の2条件を設定した大規模なインターネット実験をおこなう。

### 5.2 方法（楠見, 2016）

#### 5.2.1 参加者

全国900（男女各450）人の16～86（平均45.8）歳のインターネット調査会社のモニターである（16～29歳100人、30～60代は各80人、70歳以上は30人、男女同数）。なつかしい映像群と中性（ニュートラル）映像群に半数ずつ割り当てた。職業は就労者58%、主婦19%、無職16%であった。

### 5.2.2 トリガー刺激

なつかしいまたはニュートラルな風景・場面・事物の画像それぞれ24枚を各3秒呈示した。なつかしい画像と中性画像は、『素材辞典』（データクラフト社）から、前者は主に「四季・日本の原風景編：vol.122」などから、後者は「四季・やすらぎの風景編：vol.94」などから選択した。

### 5.2.3 質問項目

(a) 映像による感情評定（16項目、映像を見て、どのようなことを感じたり、思ったりしたか：なつかしい気分がしてくる（なつかしき喚起）、親近感喚起 [3項目、昔、行ったことがある場所のような気分がしてくる、昔、見たことがある場面のような気分がしてくる；写真やテレビなどで見たことがある気分がしてくる] など）（5点尺度）、(b) ソーシャルサポート尺度（岩佐・権藤・増井, 2007, 7点尺度12項目）、(c) なつかしき傾向性：表1のなつかしきのネガティブ傾向性、ポジティブ傾向性（8点尺度）、(d) 個人差指標：改訂UCLA孤独感尺度短縮版（10項目、5点尺度、諸井, 1992）、人生満足度（SWLS, 5項目、7点尺度、Diener et al., 1985）、自尊心（Rosenberg Self-Esteem Scale: RSES, Rosenberg, 1965の10項目から“I wish I could have more respect for myself”を除いた9項目、7点尺度）について、24枚の画像からなるすべての映像提示後に評定を求めた。

### 5.3 結果と考察

操作チェックとして、なつかしい映像条件と中性映像条件による提示後の「なつかしき喚起」の平均評定値を確認したところ、それぞれ3.50,

2.91（5点尺度）であり、前者は後者よりも有意に高く、実験操作が適切におこなわれたことを確認した（表5）。さらに、[親近感喚起]の（3項目平均値）の両平均評定値とも高かった。これは、画像選定と実験操作が適切におこなわれたことを示している。年齢となつかしき傾向、社会的サポートなどの変数との相関を見ると、なつかしき画像条件においては、[年齢]は、[なつかしき喚起][親近性喚起][なつかしきポジティブ傾向]と正相関、[なつかしきネガティブ傾向]と負相関があった。さらに、[年齢]は[社会的サポート][人生満足度][自尊心]と正相関、一方、[孤独感]と負相関があった。さらに、なつかしき画像条件においては、なつかしきや親近性の喚起は、[社会的サポート][人生満足度]、[自尊心]との正相関、[孤独感]との負相関はなつかしい映像条件の方が高かった。一方、これらの相関は、中性映像条件においては全体に低かった。中性条件においても弱い相関があったのは、中性条件においてもなつかしきの弱い喚起があったためと考える。

図8は、なつかしい映像群と中性映像群における刺激提示後の「社会的サポート」と「自尊心」「人生満足度」「孤独感」の年齢変化を示す。2要因分散分析（2映像条件×6年齢群）をおこない、なつかしい映像群-中性映像群と年齢変化の関係を検討した。(A) [社会的サポート]（交互作用  $F(5,868)=.59, p=.71$  偏  $\eta^2=.003$ ）の単純主効果を検討したところ、18～29歳と30代において、なつかしい映像群は中性映像群よりも評定値が高い傾向があった ( $ps=.06$ )。[自尊心]（交互作用

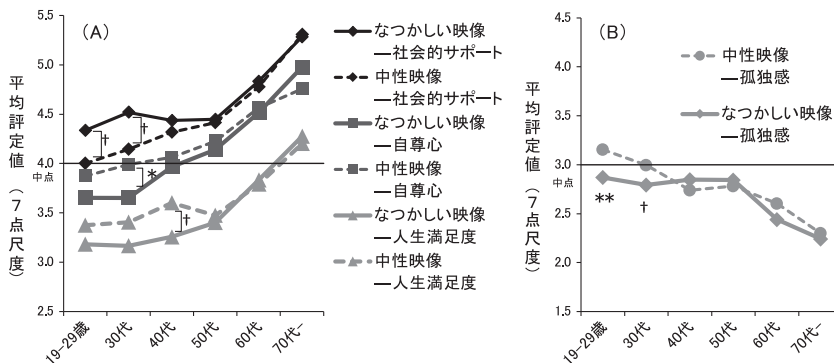


図8 なつかしき-中性映像提示による (A) 社会的サポート、自尊心、人生満足度、(B) 孤独感の年齢差。\*:  $p<.05$ , \*\*:  $p<.01$ , †:  $p<.10$  (研究3)

表5 なつかしい-中性映像によるなつかしさの喚起とその機能との相関（下三角行列：なつかしい映像群\上三角行列：中性映像群）：研究3

指標	なつかしい映像群		中性映像群		r(898)	年齢	なつかしさ 喚起	親近感 喚起	なつかしさ ポジティブ ネガティブ	社会的 サポート	孤独感	人生 満足度	自尊心
	M	(SD)	M	(SD)									
年齢	45.68	(16.29)	45.87	(16.1)	0.18		.18 ***	.24 ***	.08	.16 ***	-.20 ***	.14 **	.27 ***
なつかしさ喚起	3.50	(1.22)	2.91	(1.17)	7.43 ***	.26 ***	.68 ***	.23 ***	.06	.11 *	-.09	-.02	.11 *
親近感喚起	3.32	(1.05)	2.75	(1.01)	8.28 ***	.32 ***	.63 ***	.26 ***	.03	.22 ***	-.12 **	.10 *	.15 ***
なつかしさポジティブ 傾向 (NP-P)	4.20	(1.36)	4.10	(1.31)	1.20	.25 ***	.33 ***	.37 ***	.28 ***	.32 ***	-.23 ***	.12 **	.13 **
なつかしさネガティブ 傾向 (NP-N)	4.07	(1.54)	4.19	(1.47)	1.26	-.27 ***	-.06	-.06	-.02	-.23 ***	.35 ***	-.39 ***	-.45 ***
社会的サポート	4.56	(1.24)	4.38	(1.31)	2.08 *	.26 ***	.26 ***	.42 ***	-.34 ***	-.74 ***	.45 ***	.45 ***	.53 ***
孤独感 (UCLA.L.S)	2.73	(0.75)	2.83	(0.82)	1.94 †	-.28 ***	-.23 ***	-.41 ***	.48 ***	-.83 ***	-.45 ***	-.45 ***	-.63 ***
人生満足度 (SWLS)	3.52	(1.22)	3.38	(1.26)	1.65 †	.22 ***	.16 ***	.25 ***	-.38 ***	.51 ***	-.50 ***	.62 ***	.68 ***
自尊心 (RSES)	3.47	(1.02)	3.35	(1.06)	1.79 †	.36 ***	.24 ***	.27 ***	-.47 ***	.60 ***	-.65 ***	.62 ***	.68 ***

註 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$  なつかしい映像群 :  $n = 450$ , 中性映像群 :  $n = 450$



$F(5,868)=.84, p=.52, \text{偏}\eta^2=.005$ )については、30代でなつかしい映像群は中性映像群よりも評定値が高い傾向があった ( $p=.06$ )。[人生満足度] (交互作用  $F(5,868)=.63, p=.68, \text{偏}\eta^2=.004$ ) については40代において、なつかしい映像群が中性映像群よりも高い傾向 ( $p=.07$ ) があった。同様に、(B) [孤独感] (交互作用  $F(5,868)=1.78, p=.11, \text{偏}\eta^2=.01$ ) の単純主効果を検討したところ、18～29歳と30代において、なつかしい映像群は中性映像群よりも評定値が低かった ( $ps=.008, .09$ )。いずれの指標においても、50代以降は、なつかしい映像による [社会的サポート] [自尊心] [人生満足度] の上昇と [孤独感] の低下は見られなかった。その理由は、加齢によるポジティブ傾向の上昇とネガティブ傾向の低下の影響が大きいためと考えられる。

### 5.3.1 なつかしさを認知が人生満足度に及ぼす影響

因果関係をより明確にするために、図9のとおり、画像によって喚起された感情が、ポジティブ-ネガティブのなつかしさを引き起こす傾向を強めることによって、異なる機能を顕在化することを想定する。ここで、なつかしさポジティブ-ネガティブ傾向は、状況によって促進される状態として考える。そこで、なつかしい映像群-中性映像群、65歳以上群-64歳以下群の4群に分けて、多母集団同時分析によるパス解析をおこなった (Amos26.0を用いた)。適合度は  $\text{CFI}=.991, \text{RMSEA}=.034 \times \sqrt{4}$  と許容できる水準であった。

その結果、(i) 映像により喚起された [なつかしさ感情] と [親近感] は、[なつかしさポジティブ傾向] を促進し、65歳以上群は未満群よりもその傾向が強い。(ii) [なつかしさポジティブ傾向] は、[社会的サポート] をいずれの群も促進する。(iii) [社会的サポート] は、いずれの群も [人生満足度] に影響を及ぼす。一方、(iv) [親近感] はいずれの群も、[なつかしさネガティブ傾向] には影響しなかった。また、[なつかしさ] 感情は65歳以上群のみ、[なつかしさネガティブ傾向] には影響しなかった。(v) そして [なつかしさネガティブ傾向] は、いずれの群も [社会的サポート] と [人生満足度] を低下させていた。

研究3の結果は、加齢にともなって、なつかしさトリガー映像は中性的映像に比べ、なつかしさや親近感の喚起が促進されること、さらに、なつかしい映像によりポジティブな気分になる傾向性が強まり、その結果、社会的なサポートが意識され、人生満足度が高まるというなつかしさの機能が明らかになった。一方、ネガティブななつかしさ傾向が促進された場合は、こうしたなつかしさの機能は抑制された。

### 5.4 なつかしさを認知の年齢差・個人差：研究4

なつかしさには、研究3で示した社会的な結びつきを顕在化させ、人生満足度などを高める機能の他に、自己の時間的連続性を認識し、自己を明確にして、人生の意味を気づかせるなどの心理的機能がある (e.g., Cheung et al., 2013; Hepper et

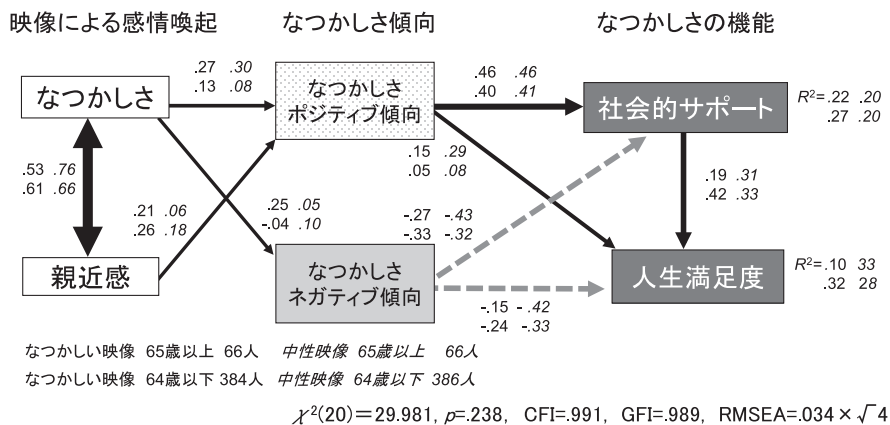


図9 なつかしさを認知がなつかしさ傾向（状態）を介して、社会的サポートと人生満足度に及ぼす効果：多母集団同時分析によるパス解析の結果（数値は標準化パス係数、点線は負の影響を示す）（研究3）

al., 2012; Sedikides et al., 2016)。これまでの研究は、大学生を主な対象とした研究が多く、幅広い年齢層を対象とした、加齢やなつかしき傾向の個人差の影響についての研究は少ない。そこで、本研究では、加齢と3.1で取り上げたなつかしきポジティブ-ネガティブの傾向が、なつかしきの機能に及ぼす影響を、幅広い年齢層を対象とした調査に基づいて検討する。

## 5.5 方法 (楠見, 2018)

### 5.5.1 参加者

全国の1001 (男495, 女506) 人。20~89歳のインターネット調査会社モニターが回答した(16~19, 20代, 30代, 40代, 50代, 60代, 70代, 80代で、それぞれ60, 74, 128, 151, 194, 229, 125, 40人)。そのうち172人は研究1(3年前)と研究2(2年前)の調査に継続参加, 243人は研究1に参加, 385人は研究2に参加していた。職業は就労者52%, 主婦22%, 無職21%であった。既婚者58%, 4大卒以上46%であった。

### 5.5.2 調査項目

(a) なつかしき傾向性: なつかしきのネガティブ傾向性(例: 昔を思い出して寂しくなる), ポジティブ傾向性(例: 昔を思い出して幸福な気分を感じる)の各6項目(表1)とHolbrook(1993)のNostalgia Proneness尺度(HNP)短縮版3項目(古き良き時代にあこがれる; 今よりも昔の方が、自分は幸せであった; 私は時々、人生をやり直せたらと思う), Southampton Nostalgia尺度(SNS; Barrett et al., 2010; Routledge et al., 2008)6項目(付表1), (b) 日本版なつかしきの拡張機能尺度: 先行研究(Cheung et al., 2013; Hepper et al., 2012; Sedikides et al., 2016)の項目を翻訳した16項目の4下位尺度(付表2), 社会的結びつき(例: 愛する人たちとつながっている), 自己の時間的連続性(例: 昔の自分とつながっている), 人生の意味(例: 人生には意味がある), 自己の明確性(例: 自分自身のことを知っている)の各4項目の6段階評価, (c) 他の個人差変数: 人生満足度(SWLS, 5項目, Diener et al., 1985), 幸福度(11段階), 自尊心(RSES: Rosenberg, 1965, 10項目), なつかしきのトリガー(表3)の回答を求めた。

## 5.6 結果と考察

### 5.6.1 なつかしき傾向性と機能の相関

表6の男女別相関を示す。[なつかしきポジティブ傾向]と[Southampton Nostalgia尺度(SNS)]は、なつかしきの機能である[社会的つながり][時間的連続性][人生の意味][自己の明確化], さらに[自尊心][人生満足度]と正相関があり、女性の方がやや高かった。[なつかしきネガティブ傾向]はなつかしきの機能の変数とは男女とも負相関あるいは無相関だった。また, [Southampton Nostalgia尺度(SNS)]は, [なつかしきポジティブ傾向]および[Holbrook Nostalgia Proneness尺度(HNP)短縮版]と正相関があった。

### 5.6.2 なつかしき機能の加齢変化

図10に示すように、なつかしきの機能の平均評定値は、20代以降は加齢にしたがって上昇した。[時間的連続性]の評定値、つづいて[人生の意味]の評定値が高かった。ここで、20代で一旦下がる年齢変化パターンは、同じ参加者による一部のトリガーに対するなつかしき評定値(図5)においても見られている。研究4の10代の参加者の人数が、他の年齢群よりも少ないため、その原因を探るためには、さらなる検討が必要である。

### 5.6.3 なつかしきの機能が人生満足度に及ぼす影響

なつかしきの4機能と[人生満足度]との相関は、[社会的結びつき](男.45, 女.51), [自己の時間的連続性](.21, .23), [人生の意味](.37, .39), [自己の明確化](.41, .43)と高かった(表6)。

さらに、多母集団同時分析のパス解析によ

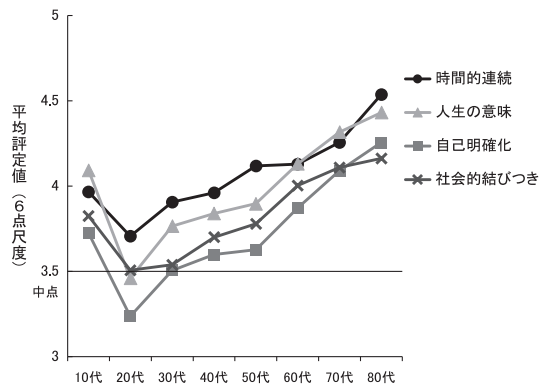


図10 なつかしきの機能の年齢変化(6点尺度, 中点3.5)(研究4)

表6 なつかしさ傾向となつかしさの機能の男女別相関 (N=1001)：研究4

	$\alpha$	なつかしさ傾向					なつかしさの機能					
		年齢	ポジティブ (NP-P)	ネガティブ (NP-N)	Holbrook (3項目) (HNP)	Southampton (SNS)	社会的 結びつき	時間的 連続	人生の 意味	自己 明確化	自尊心	人生満足度 (SWLS)
男性 (n=506)												
年齢 (Age)		.13 **			.00	.01	.18 ***	.14 **	.19 ***	.25 ***	.32 ***	.19 ***
なつかしさポジティブ傾向 (NP-P)	.93	.08	.25 ***	.53 ***	.69 ***	.69 ***	.34 ***	.29 ***	.34 ***	.24 ***	.21 ***	.21 ***
なつかしさネガティブ傾向 (NP-N)	.91	-.18 ***	.57 ***	.52 ***	.20 ***	-.23 ***	-.23 ***	.03	-.17 ***	-.11 **	-.45 ***	-.31 ***
Holbrook Nostalgia Proneness 尺度 (HNP) (3項目)	.72	-.07	.69 ***	.66 ***	.41 ***	-.10 *	.03	.08	.03	-.05	-.22 ***	-.28 ***
Southampton Nostalgia 尺度 (SNS)	.93	.15 ***	.69 ***	.36 ***	.48 ***	.22 ***	.27 ***	.33 ***	.33 ***	.24 ***	.15 *	.11 *
なつかしさの機能：												
社会的結びつき (Social connectedness)	.86	.21 ***	.20 ***	-.09 *	-.08	.24 ***	.40 ***	.48 ***	.61 ***	.51 ***	.54 ***	.51 ***
時間的連続 (Self-continuity)	.84	.21 ***	.22 ***	.00	.07	.29 ***	.49 ***	.42 ***	.55 ***	.51 ***	.30 ***	.23 ***
人生の意味 (Meaning in life)	.92	.19 ***	.26 ***	-.09 *	.02	.30 ***	.49 ***	.42 ***	.66 ***	.66 ***	.53 ***	.39 ***
自己明確化 (Self-clarification)	.82	.21 ***	.18 ***	-.09 *	-.03	.20 ***	.42 ***	.42 ***	.59 ***	.50 ***	.50 ***	.43 ***
自尊心 (Rosenberg Self-Esteem Scale: RSES)	.88	.40 ***	.05	-.35 ***	-.26 ***	.15 ***	.42 ***	.28 ***	.46 ***	.50 ***	.50 ***	.61 ***
人生満足度 (SWLS)	.90	.18 ***	.13 **	-.17 ***	-.26 ***	.10 *	.45 ***	.21 ***	.37 ***	.41 ***	.50 ***	.61 ***
M (SD)		51.8 (17.8)	4.02 (1.49)	3.63 (1.50)	4.25 (1.59)	3.98 (1.16)	3.71 (.89)	3.96 (.88)	3.97 (1.04)	3.73 (.91)	3.18 (.67)	3.60 (1.24)
女性		52.5 (17.3)	4.11 (1.43)	3.69 (1.48)	4.13 (1.48)	4.07 (1.17)	3.94 (.96)	4.16 (.87)	3.99 (.99)	3.71 (.93)	3.19 (.72)	3.69 (1.25)
t (999)		.68	1.02	.71	1.24	1.18	3.85 ***	3.55 ***	.40	.37	.25	1.13

註 \* $p < .05$ , \*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

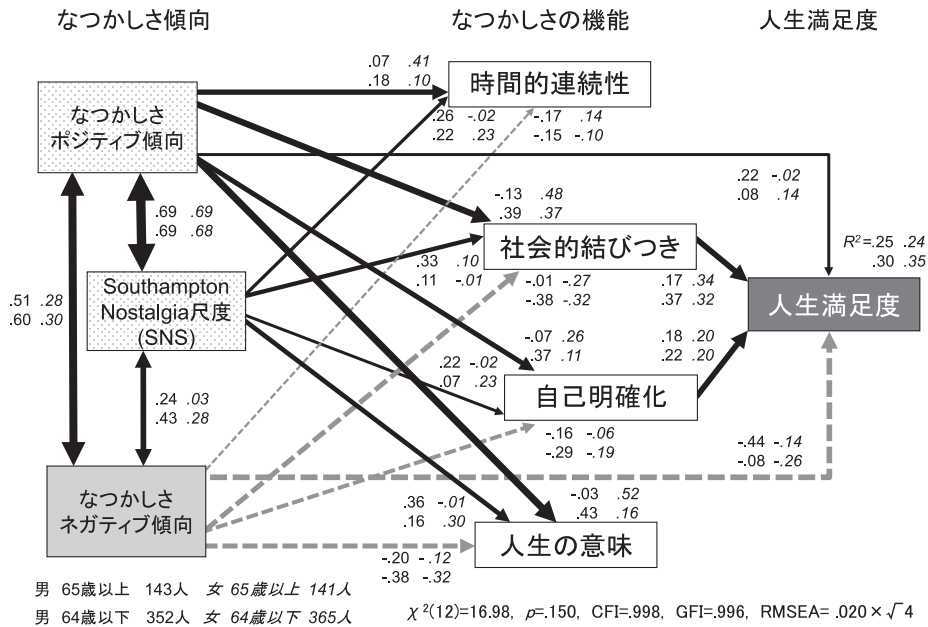


図 11 なつかしき傾向がなつかしきの機能を介して人生満足度に及ぼす効果：多母集団同時分析によるパス解析の結果（数値は標準化パス係数，点線は負の影響を示す）（研究4）

て，[なつかしき傾向性→なつかしきの機能→人生満足度]のモデルを検討した（図11）。人生満足度の説明率は24～35%，適合度はCFI=.998，RMSEAS=.020×√4と許容できる水準であった。なつかしきの機能に，(a) [なつかしきポジティブ傾向]と[Southampton Nostalgia]尺度は正の影響を，(b) なつかしきネガティブ傾向は負の影響を与えていた。(c) なつかしきの機能の[社会的結びつき]と[自己の明確化]が人生満足度に正の影響を与えていた。ただし，男性65歳以上は，なつかしきの機能への[なつかしきポジティブ傾向]からの影響は弱い，なつかしきの頻度や価値づけの指標である[Southampton Nostalgia]からの影響を強く受けていた。なつかしきポジティブ傾向の効果は弱まるのは，加齢によるポジティブ傾向（図2）となつかしき機能（図10）の上昇が影響したためと考える。また，図9との相違は，映像による感情喚起によるなつかしき傾向（状態）を指標としたためと考える。

最後に，3回の継続調査のデータに基づき，交差遅れモデルを用いて，なつかしきポジティブ傾向となつかしきネガティブ傾向が人生満足度に及ぼす効果を検討した（図12）。適合度はCFI=.971，RMSEAS=.085×√2と許容できる水

準であった。ここで，(a) 1回目のポジティブなつかしきネガティブ傾向は，2回目（1年後）の[人生満足度]にそれぞれ正と負の影響を及ぼし，その影響は64歳以下の方がやや大きかった。(b) 2回目のポジティブ-ネガティブなつかしき傾向が，3回目（3年後）の[人生満足度]に及ぼす効果は，それぞれ弱い正と負の影響を及ぼし，その影響は64歳以下でのみ見られた。2回目から3回目への影響が弱い理由は，1～2回目の間隔が1年であるのに対し，2年の間隔があったためであると考えられる。また，65歳以上群で，効果が弱まるのは，図11と同様に，加齢によるポジティブ傾向の上昇とネガティブ傾向の下降が影響していると考えられる。

研究4では，一連の研究のまとめとして，加齢となつかしきポジティブ-ネガティブの傾向が，なつかしきの機能に及ぼす影響を検討した。その結果，なつかしきの4つの機能が加齢によって上昇すること，なつかしきのポジティブ傾向性がなつかしきの機能を促進し，人生満足度を向上させることを明らかにした。さらに，研究1，研究2，研究4の3時点のパネルデータをもちいて，前の時点のなつかしきポジティブ傾向とネガティブ傾向が，つぎの時点の人生満足度にそれぞれ正負の



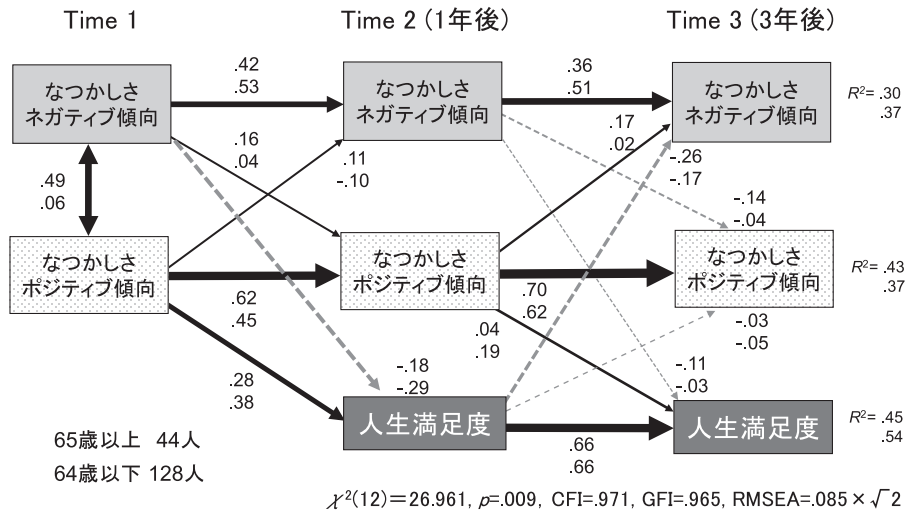


図 12 なつかしさ傾向が人生満足度に及ぼす効果：交差遅れモデルの多母集団同時分析（数値は標準化パス係数）（研究 1A, B, 研究 2, 研究 4）

影響を及ぼしていることを明らかにした。

## 6. まとめと今後の展望

本論文では、20代から80代までの幅広い年齢を対象とした5つの研究に基づいて、なつかしさの認知-感情的基盤と機能を、なつかしさポジティブ-ネガティブ傾向の個人差と年齢差を中心に検討した。

「2. なつかしさの概念構造：研究 1A」では、なつかしさとノスタルジアおよび *nostalgia* との共通性と差異 (Hepper et al., 2014; 楠見, 2014a) について検討した。3つの意味に共通する点は、[子どもの頃]の[記憶]を[思い出す]という自伝的記憶とそれに伴う[甘い記憶][心地よさ]というポジティブな感情が中核的要素であった。一方で、[悲しみ][孤独]などのネガティブな感情は周縁的要素であった。ここで、「なつかしさ」は「ノスタルジア」および「*nostalgia*」との概念的差異は小さかった。ただし、[記憶]や[社会的絆]との関連性においては、「なつかしさ」は「ノスタルジア」よりも高かった。また、[過去にそこがれる気持ち]については、「*nostalgia*」は「なつかしさ」「ノスタルジア」よりも高かった (図 1)。日本においては、研究者によって、「なつかしさ」「ノスタルジア」のどちらの概念を用いるのかは異なる (たとえば、長峯・外山, 2016)。これらの

意味の相違を踏まえて、日本におけるなつかしさ研究そして国際比較研究を進めていく必要がある。

「3. なつかしさの傾向性となつかしさの生起：研究 1B」では、2で検討した、なつかしさの概念的特徴に基づいて、そのポジティブ-ネガティブのどの側面を引き起こしやすいのかの個人差を解明する尺度を構成した。その結果、なつかしさによって、ネガティブ感情が喚起される傾向は、加齢により低下した。一方、ポジティブ感情が喚起される傾向は加齢で上昇することが明らかになった (図 2)。また、なつかしさのポジティブ傾向は、自分の人生における過去の時期へのなつかしさや、過去の時代へのなつかしさとの正相関があった。それに対して、なつかしさのネガティブ傾向は、人生や時代に対するなつかしさとの相関は小さく、後悔との正相関があった (表 2)。また、人生におけるなつかしい時期は、10代後半から20代にピークがあった (図 3)。このことは、自伝的記憶のレミニセンス・バンプ現象 (e.g., Jansari & Parkin, 1996) と対応した。

「4. なつかしさ生起のトリガーと個人差：研究 2」では、なつかしさを喚起するトリガーの種類を、人トリガーとメディアトリガーに分け、両者とも、3で述べたなつかしさのポジティブ傾向との方が、ネガティブ傾向よりも相関が高いことを明らかにした。ネガティブ傾向は、神経症傾向、

反芻傾向、孤独感と正相関があり、幸福度と負相関があることが明らかになった。また、多くのトリガーは加齢にもなって、なつかしさを強く感じるようになった。

「5. なつかしきの機能」では、なつかしき傾向が孤独感と人生満足度に及ぼす影響を明らかにするために、なつかしきトリガー刺激と中性刺激を用いた大規模なインターネット実験(研究3)をおこなった。その結果、なつかしい映像提示によって、なつかしき感情と親近感が高まり、ポジティブななつかしき傾向が促進されて、社会的サポート感が高まり、その結果として、人生満足度が高まった。ここで、社会的サポート感、人生満足度、自尊心の上昇と孤独感低下は、20代から30代で顕著で、加齢によってその効果は相対的に小さくなった。その理由は、加齢がポジティブな心理的傾向を高めるポジティブ傾向があるためと考えられた。研究4では、なつかしきによる社会的結びつきや自己の時間的連続性の認識、自己の明確化、人生の意味の気づきなどの心理的機能が加齢によって上昇することを明らかにした。さらに、社会的結びつきと自己の明確化が人生満足度に影響を及ぼしていた。最後に、3時点の継続データを用いた分析によって、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向が、つぎの時点の人生満足度に正負の影響をそれぞれ及ぼすことが示された。

本研究では、なつかしきの認知-感情的基盤として、過去に頻繁に接触し、かつ空白期間があるトリガーが、親近性となつかしい感情を生起させることを仮定した(図6)。そのことが、なつかしきのポジティブ傾向を促進し、さらになつかしきの機能を向上させていた(図9)。また、加齢により、ポジティブななつかしき傾向やなつかしきの機能の向上と、一方で、ネガティブななつかしき傾向の低下が見られた。ここで、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向は、それぞれ、個人差として、人生満足度に正負の影響を及ぼすことは、研究2(図7)、研究3(図9)、研究4(図11、図12)において、一貫して示された。

今後の課題は、以下の3点である。

第一は、なつかしきの概念の文化的普遍性と差異性を検討することである(e.g., Hepper et al., 2014)。研究1で検討したように、単純接触に基

づく「なつく」を土台としたなつかしきの独自性とnostalgiaに通じる普遍性を検討することである。

第二は、なつかしきの認知-感情的基盤として、単純接触による親近性向上からなつかしき生起にいたるプロセスを、自伝的記憶研究において、実験的に検討することである(たとえば、松田, 2021)。

第三は、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向と加齢の問題である。本論文では、4つの研究を通して、個人には、なつかしきのポジティブ-ネガティブ傾向の差異があり、それらがポジティブな機能、さらに生活満足度に影響をしていた。一方で、加齢によるなつかしきのポジティブ傾向性の向上とネガティブ傾向性の低下があり、社会情動的選択性理論(Carstensen, 1992)との対応がみられた。こうした傾向性を踏まえつつ、ポジティブ機能を促進するような回想法の効果研究を応用研究として進めることである(たとえば、野村, 2021)。

## 謝 辞

データの分析に協力いただき、草稿にコメントをいただいた京都大学大学院教育学研究科西川一二研究員、原稿にコメントをいただいた北九州市立大学松田憲教授、早稲田大学杉森絵里子准教授、山形大学小林正法准教授、青山学院大学米田英嗣准教授、京都大学大学院教育学研究科博士課程池田寛香さんに感謝申し上げます。本研究は科研費(16H02837)の助成を受けました。

## 文 献

- Barrett, F. S., Grimm, K. J., Robins, R. W., Wildschut, T., Sedikides, C., & Janata, P. (2010). Music-evoked nostalgia: Affect, memory, and personality. *Emotion, 10*, 390–403.
- Batcho, K. I. (1998). Personal nostalgia, world view, memory, and emotionality. *Perceptual and Motor Skills, 87*, 411–432.
- Batcho, K. I., DaRin, M. L., Nave, A. M., & Yaworsky, R. R. (2008). Nostalgia and identity in song lyrics. *Psychology of Aesthetics, Creativity, and the Arts, 2*, 236–244.
- Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory, 11*, 113–123.
- Carstensen, L. L. (1992). Social and emotional patterns in adulthood: support for socioemotional selectivity theory. *Psychology and aging, 7*, 331–338.
- Cheung, W. Y., Wildschut, T., Sedikides, C., Hepper, E. G.,

- Arndt, J., & Vingerhoets, A. J. (2013). Back to the future: Nostalgia increases optimism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 39, 1484–1496.
- Davis, F. (1979). *Yearning for yesterday: A sociology of nostalgia*. N.Y.: The Free Press. 間場寿一・細辻恵子・荻野美穂 (訳) (1990) ノスタルジアの社会学世界思想社.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. L., & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71–75.
- Hepper, E. G., Ritchie, T. D., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2012). Odyssey's end: Lay conceptions of nostalgia reflect its original Homeric meaning. *Emotion*, 12, 102–119. doi: 10.1037/a0025167
- Hepper, E. G., Wildschut, T., Sedikides, C., Ritchie, T. D., Yung, Y. F., Hansen, N., Kusumi, T. ... Zhou, X. (2014). Pancultural nostalgia: Prototypical conceptions across cultures. *Emotion*, 14, 733–747.
- Holbrook, M. B. (1993). Nostalgia and consumption preferences: Some emerging patterns of consumer tastes. *Journal of Consumer Research*, 20, 245–256.
- 岩佐 一・権藤恭之・増井幸恵 (2007) 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性—中高年者を対象とした検討 厚生 の指標, 54, 26–33.
- Jansari, A., & Parkin, A. J. (1996). Things that go bump in your life: Explaining the reminiscence bump in autobiographical memory. *Psychology and Aging*, 11, 85–91.
- Juhl, J., Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2010). Fighting the future with the past: On the death-anxiety buffering function of nostalgia. *Journal of Research in Personality*, 44, 309–314.
- 北原保雄ら (編) (2003) 日本国語大辞典 第二版, 小学館.
- 楠見 孝 (編) (2014a) なつかしさの心理学：記憶と感情, その意義 楠見 孝 (編) なつかしさの心理学：思い出と感情 (pp. 1–22) 誠信書房.
- 楠見 孝 (2014b) なつかしさ経験に及ぼす加齢の影響：ノスタルジアとの差異の検討と傾向尺度の作成 日本社会心理学会第 55 回大会発表論文集, 106, 北海道大学.
- 楠見 孝 (2015) なつかしさのポジティブ-ネガティブ傾向性とトリガー：孤独感と幸福度に及ぼす影響 日本社会心理学会第 56 回大会発表論文集, 56, 東京女子大学.
- 楠見 孝 (2016) ポジティブな懐かしさ感情の加齢による増大 社会情動的選択性理論に基づく検討 日本社会心理学会第 57 回大会論文集, 93, 関西学院大学.
- 楠見 孝 (2018) 加齢によるポジティブな時間的展望となつかしさの増大 日本発達心理学会第 29 回大会論文集, P1-22, 東北大学.
- Kusumi, T., Matsuda, K., Sugimori, E. (2010). The effects of aging on nostalgia in consumers' advertisement processing. *Japanese Psychological Research*, 52, 150–162.
- 松田 憲 (2021) 単純接触効果となつかしさ感情 心理学評論, 64, 29–46.
- 諸井克英 (1992) 改訂 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討 人文論集 (静岡大学人文学部社会学科・人文科学研究報告), 42, 23–51.
- 長峯聖人・外山美樹 (2016) 日本人はノスタルジアを経験しうるか? : ノスタルジアの "bittersweet" な側面に着目して 感情心理学研究, 24, 22–32.
- 長峯聖人・外山美樹 (2018) 本邦におけるノスタルジアの機能的特徴：感傷を伴う懐かしさという観点から 筑波大学心理学研究, 56, 21–26.
- 長峯聖人・外山美樹 (2019) Southampton Nostalgia Scale 日本語版の作成 心理学研究, 90, 389–397.
- 長峯聖人・外山美樹 (2020) ノスタルジアと自己-出来事関連性との関係：心理的成長感と社会的つながりを考慮して パーソナリティ研究, 28, 198–207.
- 野村信威 (2021) 回想法のエビデンスとその限界 心理学評論, 64, 136–154.
- 小塩真司・阿部晋吾・カトローニ, P. (2012) 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21, 40–52.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Routledge, C. (2016). *Nostalgia: A psychological resource*. New York, NY: Routledge.
- Routledge, C., Arndt, J., Sedikides, C., & Wildschut, T. (2008). A blast from the past: The terror management function of nostalgia. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 132–140.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. R. (2002). Maximizing versus satisficing: Happiness is a matter of choice. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 1178.
- Sedikides, C., & Wildschut, T. (2018). Finding meaning in nostalgia. *Review of General Psychology*, 22, 48–61.
- Sedikides, C., & Wildschut, T. (2019). The sociality of personal and collective nostalgia. *European Review of Social Psychology*, 30, 123–173.
- Sedikides, C., Wildschut, T., Cheung, W. Y., Routledge, C., Hepper, E. G., Arndt, J., ... Vingerhoets, A. J. (2016). Nostalgia fosters self-continuity: Uncovering the mechanism (social connectedness) and consequence (eudaimonic well-being). *Emotion*, 16, 524–539.
- Steiger, J. H. (1998). A note on multiple sample extensions of the RMSEA fit index. *Structural Equation Modeling*, 5, 411–419.
- 高野慶輔・丹野義彦 (2008) Rumination-Reflection

- Questionnaire 日本語版作成の試み パーソナリティ研究, 16, 259–261.
- The New Oxford Dictionary of English*. (1998). (J. Pearsall, Ed). Oxford, UK: Oxford University Press.
- Verplanken, B. (2012). When bittersweet turns sour: Adverse effects of nostalgia on habitual worriers. *European Journal of Social Psychology*, 42, 285–289.
- Wildschut, T., Sedikides, C., Arndt, J., & Routledge, C. (2006). Nostalgia: Content, triggers, functions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 975–993.

— 2020. 11. 14 受稿, 2021. 3. 10 受理 —

付表1 日本版 Southampton Nostalgia 尺度 (SNS; Barrett et al., 2010 ; Routledge et al., 2008)

つぎのことがらは、あなた自身にどのくらいあてはまるか、「1：全く……でない」から「7：とても……である」までの数字のいずれかにチェックをつけてください。

1. なつかしきはあなたにとって、どのくらい価値あることですか？
2. なつかしい経験を思い浮かべることが、あなたにとってどのくらい重要ですか？
3. なつかしきを感じることはあなたにとって、どのくらい意義あることですか？
4. あなたはどのくらい昔をなつかしむ傾向がありますか？

つぎのことがらを、あなたはどのくらいの頻度で経験するか、「1：非常にまれ」から「7：とても頻繁」までの数字のいずれかにチェックをつけてください

5. どのくらい頻繁になつかしきを経験しますか？
6. 一般的に言って、どのくらい頻繁になつかしい経験を思い浮かべますか？

註：7項目版では、最後に「どのくらい頻繁になつかしい経験を思い浮かべますか？」がある。選択肢は、少なくとも1日に1回、1週間に3・4回、1週間におよそ2回、1週間におよそ1回、1か月に1・2回、2か月に1回、1年に1・2回、(1年に1回未満)。最後の( )に入れた選択肢は下記の最新版にはない。  
<https://www.southampton.ac.uk/nostalgia/the-southampton-nostalgia-scale.page>

付表2 日本版なつかしきの拡張機能尺度  
(Cheung et al., 2013 ; Hepper et al., 2012 ; Sedikides et al., 2016 に基づいて構成)

1. 私は愛する人たちとつながっている
2. 私は守られている
3. 私は愛されている
4. 私は他者を信頼できる
5. 自分の過去とつながっている
6. 昔の自分とつながっている
7. 自分の人生には連続性がある
8. 自分の性格の大切な側面は時間がたっても変わらない
9. 人生には意味がある
10. 人生には目的がある
11. 人生にはより大きな目的がある
12. 人生は生きる価値がある
13. 自分自身のことを知っている [自分自身のことには確信を持っている]
14. 自分がどういう人間であるか知っている
15. 自分の人生の目的を知っている
16. 世界の中での自分の位置を知っている [自分の立場 (居場所) を知っている]

註：あなたの人生における最もなつかしい出来事について思い起こしてください。そのことを思い浮かべながら、あなたは、以下のそれぞれのことをどのくらい感じますか。「1：まったくあてはまらない」から「5：とてもあてはまる」までのいずれかをチェックしてください。  
 社会的結びつき (1～4)、自己の時間的連続性 (5～8)、人生の意味 (9～12)、自己の明確性 (13～16)